

「農業体験を伴う大学生との食育意見交換会」概要 ～体験から学ぶ食と農～

鳥取地域センター

<p>・日時、場所、参加者</p> <p>I 農業体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さつまいも苗植え：平成25年6月26日 鳥取短期大学附属幼稚園 チクチク山農園 ふぁーまーがーるず（鳥取短期大学食物栄養専攻学生10名） 鳥取短期大学附属幼稚園5歳児 ・草抜き、水やり、いもの観察：随時 鳥取短期大学附属幼稚園 チクチク山農園 ふぁーまーがーるず ・収穫（芋掘り）：平成25年11月6日 鳥取短期大学附属幼稚園 チクチク山農園 ふぁーまーがーるず 鳥取短期大学附属幼稚園5歳児 ・スイートポテト作り（調理）：平成25年11月20日 鳥取短期大学附属幼稚園5歳児室 ふぁーまーがーるず 鳥取短期大学附属幼稚園5歳児 <p>II 食育意見交換会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意見交換会：12月3日、14時50分～18時00分 鳥取短期大学 大講義室 鳥取短期大学食物栄養専攻学生46名、鳥取短期大学附属幼稚園教諭、 鳥取短期大学教授 出席者 全体56名（講師を含む参加者50名、センター関係者6名）
<p>・主催：中国四国農政局鳥取地域センター ・後援：鳥取短期大学</p>
<p>・内容</p> <p>I 農業体験</p> <p>今年も鳥取短期大学附属幼稚園の農園を借り、栄養教諭を目指している鳥取短期大学学生10名が「ふぁーまーがーるず」を結成し、さつまいも作りの農業体験を行いました。</p> <p>1 さつまいも苗植え</p> <p>今年も鳥取短期大学附属幼稚園5歳児と共にさつまいもの苗植えを行いました。</p> <p>JA鳥取中央宇崎真理子教育広報課長から「さつまいもの育て方」の説明を受けた後、宇崎課長の指導により、芋が大きくなる「たて植え」と、芋が沢山つく「ななめ植え」で、さつまいもの苗を植えました。</p> <p>植えたあとに「美味しくなれ、美味しくなれ。」と呪文をかけています。</p>

<p>2 草抜き、水やり、いもの観察</p>

3 いも掘り（収穫）

園児と一緒にいも掘りをしました。大きい芋、小さな芋、つるにはたくさんの芋がついていました。農業体験の楽しさを実感しました。



4 スイートポテト作り（調理）

スイートポテトのレシピは、ふぁーマーがーるずが作り、11月5日に試作をしました。当日は、下ごしらえをしたさつまいも（蒸したさつまいもを熱いうちにつぶし、バターと砂糖を加え混ぜたもの）を幼稚園に持っていきました。

幼稚園では、下ごしらえをしたさつまいもに生クリームと卵黄を加えた後混ぜ、スプーンや絞り袋を使いアルミカップに入れました。園児のみんなと楽しく調理し、給食と一緒にスイートポテトをいただきました。



農業体験を通して園児ととても楽しい交流ができました。

II 食育意見交換会

はじめに、中国四国農政局消費・安全部次長 中村 達雄、並びに鳥取地域センター長 北口 健司が開会のあいさつを行い、続いて講演、取組み発表及び意見交換会を行いました。

1 講演：「五感で覚える食農教育のすすめ ～野菜のいのちに学ぶ～」 食育研究家 川上 一郎 氏

講師プロフィール

「食育研究家」

鳥取県生まれ。1962年鳥取県入庁。野菜特技普及員、農業大学校教育部長、農業改良普及所長、農産園芸課長、農林振興局長。県を退職後、JA鳥取県中央会専務理事、鳥取県教育委員会産業教育審議委員、JA鳥取県食農教育支援センター理事長を歴任。

現在、鳥取県農業会議会長、食と農の応援団団員、教育視点を重視した“五感で覚える「三次元・食農教育」”を提唱。著書に特産シリーズ「ラッキョウ」農文協、「ふるさとの野菜」（共著）誠文堂、「野菜を育てて学ぶ食育実践BOOK」家の光協会など。講演活動も多数。



講演概要

- 知識や法律、ルールやお金では解決できないものがたくさんあると思います。大自然の中で生き物は頑張って生きています。そこから学び取るとはたくさんあります。皆さんも今年作った、さつまいもから、何を学んだのか、これが1番の収穫だと思います。
- 十数年間食育の関係でお話した中で、1番難しかったのは、幼稚園児・保育園児を相手にしてお話したことです。どんな話し方で、どこまでの単語を使っていいのかで、苦労しました。話をするときは、先生が1番偉い人だと思っているので、「先生は」と言う必要があります。そこから始まりますが、さあ内容はどっからどこまで、いろいろ苦労して話しましたが、15分間もう満点といえるほど乗ってきました。数年前も京都の大学の講堂で学生に1時間半の講義をしました。教授から聞いていた最近の学生の話とは違い、シーンとして真面目に聞いてもらいました。そのとき、幼稚園児に話した内容をお話ししました。つまりは、何を言いたいかといえますと、誰に話しをするときも、大事なことは1つです。私たちが食べている食材の大元になる生き物の、その真髓を問うか問わないかです。
- 最近の猫は、ねずみを捕らないと言います。ねずみが出ると猫が逃げると言います。調査した結果、子猫のときにじゃれて、しっかり遊んだ猫ほどねずみをよく捕るようです。最近の猫は、ほとんどそういう経験がありませんから、動くものに関心も魅力もないという育ち方をします。ご商売の世界で売られている猫は、なるべく費用がかからない、かわいい猫ほどよく売れます。そのために、乳離れを早くして、出来るだけ小さい時に売りに出します。買った人はねずみを捕ることが目的ではないので、かわいがって抱いていきます。今の猫は、まったく1人で遊ぶことがない状態になっています。
- 競走馬のサラブレッドには調教師がいます。調教師には、大事なことが2つあります。まず1つは、馬の背中に人を乗せるため、嫌われないようにどう教えるかです。これは、何回も人を乗せて行くと、慣れてくるそうです。ですから回数です。ところが、走る気持ちにさせなければいけません。いかにして走る気持ちにさせるかが1番難しいそうです。どうしているかということ、子馬のときに、人間は一切かかわらないで、子馬だけの群れで遊ばせる。これが、世界中の調教師の共通点だそうです。人間が関わってはいけません。ですから、子馬の群れの中で、どうしているかと言いますと、誰かが餌をやりに行くとき物音がして、これは餌だということを、何十頭かの1頭が先にパッと気づきます。そうすると、餌場のほうにダッと走りかけます。1頭が走りかけると、皆ダッダッと走ります。先に行ったほうが勝ちですから、これは、競争です。今度は危険な音をパッと感じ、どれか1頭がサッと逃げると、我もって事で、追いかけて先に逃げようとする。こういうことを、誰も教えずとも、自然とそういうものを身につけていくと言います。その体験をした馬でないと、後からどんなことをしてもだめだと言います。実際の競馬場では、ほかの馬が走るの、一生懸命、負けないという気持ちをもって走ります。それを手綱で上手に調教するのが騎手です。
- 調教師、騎手は、馬を鞭で叩きます。いじめではないかと、大批判を受けました。これについて騎手はどう答えたかということ、「教育ではありません。この鞭を打った効果は、その時に瞬発力が出るだけです。だから、この手法を教育に使っても何の意味もありません。」鞭はその時だけの効果だと答えています。いろいろな動物と全部一緒にするわけではありませんが、今までの話には、共通するところが、たくさんあると思います。今2歳や3歳の子どもに、どういう子育てのテクニックが必要かを考えたときに、全部参考になると言います。
- 文化と心と体、この3つがゴール（目的）になると言います。豊かな心、健やかな体、確かな文化という部分が総合して人間力、生きる力となります。これに結びつけるためにどうするか、知識やルールではなく、五感です。五感は皆さんご承知のように、4つは首の上についています。目、耳、鼻、舌です。4つは上についています。あと1つは、触覚です。普通



昆虫は、触角のアンテナを持っていますが、人間は肌、皮膚です。肌、皮膚というのは、全身についています。4つは部品ですが、あと1つの肌、触覚は全身です。昔の人間の五感の使い方と、現代人の使い方と比べると、一番大きな違いは、肌、全身を使っていないと言うことが、問題になってきました。暖房、クーラー、手袋、靴下、靴、スリッパと、いたれりつくせりで保護していますので、肌を使うチャンスがなくなってきています。これを鍛えていく必要があります。中でも、手の平は敏感です。さらに敏感なところは、足の裏です。人間の先祖は、四つん這いで歩いていたので、たえず接触していました。ここには血管も神経



もいっぱい集中しています。ですから、いまだに裸足で歩いている国では、すごく機能していますので、足の親指と人差し指とが離れています。今、日本人や、先進国は、靴をはいているので、くっついていて、これだけでも違っています。だからマラソンは裸足の国が強いんです。ずっと詰めていくと、とんでもないところに、いろいろな問題が起きてきている。その原因は何かといえ、豊かさ、お金が出来てきた。いろいろ発明されて、近代化されて、便利になったことの裏側に、問題があるということ、認識しなくてはなりません。

- 動物の基本動作は、動くこと、食うこと、眠ること、産むこと、自立することの5つです。すべての動物は、この5つはきちんと守っています。人間だけは、逆にこの5つだけを、全部怠ってきています。動かなくなりました。食うことが無茶苦茶になりました。眠ることも乱れてきました。産むことも、基本的な点から外れてきました。自立ということは自殺を想定してください。人には依存心があるので、人のせいにすることもあります。結果は自殺の問題です。自分ひとりでは生きられない。動物の中で、自殺は人間だけです。他は、最後まで強く生きています。この点で、人間だけが、問題を抱えてしまいました。
- 地球上で私たちが生きるために一番大切なものは、中国の古典の中に出てきますが、陰陽・五行だと思えます。陰陽・五行というのは、1週間の日月火水木金土この7つです。陰と陽というのは、日月、日というのは太陽です。昼間明るいということです。月は文字通り月で、暗い夜のことです。つまり昼と夜、太陽と月、これが陰と陽です。この昼と夜という基本は、生き物にとっての大原則で、これに皆合わせています。腹時計や、体内時計のように、6兆ある細胞の、1個1個に全部刷り込まれていることが、医学的に分かってきました。不規則な生活は、その間に乱れが起きて、いろいろな異常なホルモンが出て、体の調子が悪くなります。全部の細胞に、備わっていますから、教え込むことはできません。これが生理ということ、自覚する必要があります。火水木金土の五行の、火曜日は火です。火を使うのは、人間だけです。これがあって、食文化も全部発達してきています。水、これは水です。水は生命の根源です。木、これは植物です。植物が食べ物、一番大元を作っています。無機物を有機物に合成できるのは、植物だけです。第一義は植物が生産したものを、動物が食べるということです。しかし、この2つの関係だけで終わると、無機物が減って、植物が育たなくなります。そこで出てきたのが微生物です。微生物は有機物を分解します。植物が作ったものを動物が食べて、その動物が、最後は土に帰って、土から分解されて、無機物になってまた植物が有機物に合成する。これでようやく、生産と消費と還元のバランスが取れた循環となります。これを生命連鎖や、食物連鎖といいますし、言い方を変えれば身土不二とか地産地消という理念になります。しかし、今は60%も外国から食べ物を輸入しているので、この循環が、ずたずたに切れています。ここが問われていることを、何も語らずに、金さえあれば外国から買えるという考え方では、将来に大きな禍根を残していくことを考えていただきたいと思えます。金の金はこれは金属の金を指します。これはもう腐りもしませんし、金属の中では一番の最高のものとされていますが、これは食べ物には関係ありません。最後の土曜日、土です。いま食べ物の論を考えようとするときに、農業があります。そこでの7つの中で、太陽と夜と水と植物と土と7つのうち5つが、農業の生産現場で中心の要素になっています。食べるときに火が加わります。こういう基本的なところに、意識を向けていただき

たいと思います。そこで具体的にどう進めていくかということですが、まず、動く、食う、寝るのところで、動かなくなったという面では、昔の人と比べて、衰えてきています。背は高くなっていますが、質的に衰えてきています。こういう動かなくなったことが、いろいろなことに影響します。自動車ができて、乗り物ができて、便利が良くなりました。東京に行くと、よく歩いています。いろいろなところを早歩きしています。田舎ほど、玄関横付けです。昔と違って便利の悪い所のほうが、歩きません。動きません。こういう問題を、重要視すべきだと思っています。

- 食べることにしてもいろいろな問題がありますが、1つは、噛むことです。この噛む回数が減ってきています。今1食食べるのに平均620回あごを動かします。ちなみに戦前戦後の時代には、1420回と言われていました。江戸時代は、1450回です。江戸時代と戦前戦後では、たった30回しか違いません。考えてみると、私たちの子どものときは、農業の方法も生活様式も、江戸時代と変わっていません。がらりと変わったのは高度経済成長からです。軟らかい物を食べるようになり、噛む回数が少なくなりました。噛む回数が少なくなると、あごの発達が悪くなりますので、あごが小さくなります。あごが細くなると、歯並びが悪くなります。歯並びが悪くなると、噛み合わせが悪くなります。噛み合わせが悪くなると、消化が悪くなります。さらに、噛み合わせが悪くなると、響きが悪くなります。響きというのは、噛むことによって、脳細胞に刺激がいき、脳の運動になっていきますので、響きの悪い音が聞こえると、異様なホルモンが出てくるそうです。そもそも口を動かすと、精神安定ホルモンが出てくるそうです。プロ野球の選手が、バッターボックスに立つときに、リラックスするためチューインガムを噛んでいます。噛む事によって精神安定ホルモンが出てきますから、落ち着きが出てきます。はじめはマナーが悪いと思っていましたが、何か許せるような気持ちになります。そういうものの見方、考え方が1つ違って、ガラリと変わります。しかし、現在間違いの無い論だと思っていますが、100年たって、実はこうだと、論が覆されるかもしれません。つまりは、我々がいろいろなことを考えていますが、分からない事のほうが多いんです。そのことだけははっきりしててください。学者が発表したからと、理屈に乗って食べていくと、特に栄養学では、基本的なことはいいいですが、いろいろな問題が言われてくる。これはとんでもない落とし穴に入ることがあります。

- 皆さんさつまいもを今年お作りになったということですが、それにちょっと触れておきます。皆さんさつまいもは根が太ったというのはご承知ですよね。子孫繁栄のために、でんぷんを蓄えて、将来赤ちゃんとして、次の世代としていくという仕組みですが、どの根が芋になったのか、根が全部芋になるのかを、考えてください。最初に出た芋だけしか芋になりません。つまり栄養の条件が1番整った根ということになります。1つでは芋の数は少ないです。同時に三つ子でサッと出たら3個です。いかにして三つ子をパッと出させるかがコツの1つです。それには苗を植える時、苗が元気で力が無いと、パッと同時に強い根が出てこないんです。ところが根が出てくるところは、葉の付け根と決まっていますから、葉の付け根1か所土に埋めたら、そこだけしか根が出ません。これでは芋が少ないので、根が出てくる箇所を何箇所か同時に土に埋める、これが船底型とかいろいろな形で名前がついている植え方です。皆さんはいくつ節を土に植えましたか。ミツバチでもそうです。女王蜂と名が付くものだけしかいないんです、あとは全部働き蜂です。女王にならなかつたいもの根は皆、吸収根、働き根です。では鳥取県の梨や、柿、りんごはどうですか。りんごや梨や柿の、あの果実が女王葉です。女王の葉だけしか赤ちゃんはいないんです。あとの葉は全部、働き葉です。梅と桃をご覧になると、片方に筋がスーとついています。あれは葉が、キューっとまくった状態の筋のあとです。もっと分かりやすくいうと、豆の鞘。インゲンでも大豆でも、葉が折りたたんだ状態が鞘なんです。女王葉になったものが豆の鞘になります。だからそこに赤ちゃんが出来ます。たっ



たこれだけのことです。幼稚園児にお話したのは、そこです。ミツバチの女王蜂と働き蜂を知っているかと聞いたら、知ってる、知ってるというんです。これが女王葉といい梨を見せて、バンと割って女王葉には赤ちゃんがいます。こちらの葉は、働き葉、働き葉がせっせと働いて、赤ちゃんのいる女王葉にどんどん栄養を送ります。送るからこうゆう丸々太った果実になるんです。その果実を、赤ちゃんのための果実の栄養を、頂いているというところから始まります。では、働き葉はどうなりますかと言うと、赤くなる、黄色くなるというんです。黄色くなった葉っぱはどうなりますかと聞いたら、落ちると言うんです。落ちた葉はどうなりますかと言うと、腐ると言うんです。腐る葉はどうなりますかと言うと、幼稚園児が、肥やしになると言うんです。春になるとどうなりますかと言うと、芽が出る、花が咲くと言うんです。私たちが話をしようとするのが皆、全部分かっているんです。それが基本なんです。こういうことを私たちは日ごろの中で、たえず考えなくても、考えている暇は無いわけですから、体験で、体で覚えていく、いわゆる常識です。それが身につけていないと、あれはどうか、これはどうかと、食べながら考えていけば、これは脱線するか沈没するかどっちかです。こういうことを、小さいときから、若いときから、身につけていただきたいと思っています。



- 案外分かっているようで分かっていないことが多いです。これは実例です。鳥取県の酪農家に京都の生協の皆さんが、バスで毎年やってこられます。熱心で勉強のために、酪農家のところに来て、「酪農家の経営主さんあなたは牛を飼うとき、何に1番気をつけて頑張っていますか。」という質問をしました。これに対して酪農家は、「それは毎年子牛を1頭産ませることで。」といわれました。「えっ、子牛を産まないと、お乳が出ないんですか。」自分の子どもを育てられたお母さんが、子どもを産まないとお乳が出ないんですかと言われます。「乳牛って大きくなったら乳が出る牛だと思っていました。」と言われました。
- この世の中の生き物で、人様のためだけに、物を作ったり、頑張っている生き物は1つもいません。自分のため、子孫のためです。それを横から、横取りしていただいているんです。その気持ちが分かってない。この1つにしても、分かっているようで分かってないこと。なんでもないことのようにですが大事なことです。
- 最後に、それではどうするのかと言うことですが、1つにはお母さん方の問題になりますが、子どもに対して、どんな育て方をしているかといいますと、「何々ちゃん今日は何が食べたい。」と、伺いを立てるんです。何が食べたいじゃない、何を食べるかです。食べさせるかです。こういう問題1つ考えても、それではどういう親がいいのかというと、結論は1つだけです。子どもがお母さんが作った料理を食べて、「今日の料理はとても美味しかった。お母さんって料理上手ね。」こんな言葉が子どもから返ってきたら、お母さん満点です。つまり、お母さんの、生き様、後姿を、料理を通して見せると、教えた、学ばせたとなります。このお母さんの姿が1番です。
- もう1点。教育者のマカレンコが、こういう教育は、その子が産まれる20年前から取り組まないと、間に合わないといっています。その子が産まれる20年前から食育をしてないと間に合わない。つまり25歳で、子どもを産んだお母さんから考えると、お母さんが5歳のときです。お母さんが5歳のときに勉強するのは、自学では難しいので、その子のお母さんが教えなければいけません。産まれてくる子どもの、おばあさんが食育を始めていないと、間に合わないという話です。今、日本で問題にされている食育のことは、私たちの年齢の、おじいさんおばあさんが、だめだったから、今の皆さん方のお母さんもだめにしてしまった。そして皆さんがだめになる。こういう悪循環になっているわけです。したがって、取り戻すならば、国民全員が、年寄りも若きも、一緒になって挽回しないとイケないという話で、私のお話を終わります。

2 取組み発表

(1) 「あぐりキッズスクールと食農教育の取組み」

発表者：JA鳥取中央 総務部教育広報課課長 宇崎 真理子 氏

◆ 農業体験学習「あぐりキッズスクール」について

① 目的

- ・地域の歴史的な食文化の継承
- ・いのちの基本は「食」と「農」の実践学習
体で感じ・気づき・発見する中から、いのちを育てる・いただく・つなぐことを学ぶ

② 取り組みの背景

- ・「農業の大切さ」「食の安全・安心」を子どもたちに伝えるために、平成16年開校。
 1. 農作業に参加する機会がない。
 2. 地元の特産物を知らない。
 3. 地元の良さを知らずに成長してしまう。
 4. 次の世代に食の文化が継承されない危機感。

・目標

農業や特産物に誇りと自信を持ち「郷土愛と豊かな心を育む」
「ものを育てる」ことで思いやり・生きる力を学び、「いのち」の大切さを学ぶ

③ 対象

中部管内小学校の3年生～6年生（5クラス）
第10期：平成25年4月20日開校 110名が入校
既に、第1期～第9期まで約1060名が卒業

④ メインテーマ：農業体験学習にみんなあつまれ～！地元の農業を知ろう！探ろう！

※知る＝気づく、経験する、分かる

探る＝手足の感覚によりさがす

「米づくり」を中心に12回のカリキュラム

⑤ 実施期間：平成25年4月～平成26年2月

⑥ 教材：「あぐりノート2013」と「ちゃぐりん」

⑦ 運営体制（スタッフ数：約70名）

校長：組合長

教頭：専務/常務2名

担任・副担任：各支所長・各営農センター長

クラス 統括：参事・部長・営農技術センター

指導員：営農技術センター・営農指導員

指導補助員：農校生・新採職員

事務局：教育広報課

⑧ 新採職員は食農教育の理解を促進する研修の一環

⑨ 【年2回の運営委員会、実行委員会を開催】

行政とJAの担当者で実践状況と課題への対策を検討

構成員：市・郡の小学校・教育委員会・地元新聞社・農業改良普及所・食育アドバイザー
子どもたちが地域の方々と一緒に、地域の文化と農業体験を学んでいく活動

↓

“生きる力”を受け継いでいく大切な体験

◆ 農業体験学習「あぐりキッズスクール」の効果

① 農業体験を通して、自分たちが普段食べているものが、農家の工夫や苦労によって作られていることが分かる

② JA管内の特産物に対する認識が高まる（郷土への親しみ）

③ 親子参加することで、食と農の理解が深まる（家族との会話、親子のコミュニケーション）



- ④ 生きものや人に対する優しさが生まれ、自然環境を大切にしようとする心を育てる
- ⑤ 仲間づくりという副次的効果（学校外の友達）
- ⑥ 子どもたちの情操教育にも役立つ

◆ 話のこやし

- ・ 食べるということは！？→医食同源
- ・ これで良いのか日本人→パンを食べている国を米国といい、米（ご飯）を食べている国をジャパン（日本）と言う
- ・ 人の賞味期限→50年
- ・ 子どもには腐るものを・・・→自然に近い新鮮な食材
※因みに、「親」という字は「木」の上に「立」って「見る」と書きます。
皆さん、食育の原点は家庭にあることを忘れないで欲しいです。

- ◆ 食農教育活動の効果は、すぐには現れませんので、継続が大切だと考えています。「命の教育は農でしかできない。生きる力とは体験の積み重ねである。」と考え、あぐりキッズ活動を行っています。

(2) 「さつまいもロード ～ふぁーまーがーるすとさつもんが教えるスイートポテト～」

発表者：鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻学生

ふぁーまーがーるす

さつまいもの苗植えから収穫そしてスイートポテト作りまで、鳥取短期大学附属幼稚園園児との交流とともに行った上記Ⅰ農業体験の内容を、パワーポイントを使用し発表がありました。



3 意見交換会

テーマ「体験から学ぶ食と農」

司会：鳥取地域センター 総括管理官 高橋 昭二

アドバイザー：食育研究家 川上 一郎氏

JＡ鳥取中央 総務部教育広報課課長 宇崎 真理子氏

中国四国農政局消費・安全部次長 中村 達雄

鳥取地域センター長 北口 健司

【司会】

「体験から学ぶ食と農」というテーマで、川上先生、宇崎先生にもご参加いただき、会場の皆さんとの、意見交換を進めさせていただきます。まずは川上先生に、今回の学生さんの体験について、ご感想とか、アドバイスをいただけたらと思います。

【川上先生】

学び方という面でいろいろな切り口があると思います。さつまいもを探るとき、つるがいっぱい繁っていたらわからないので、どこでもいいから好きなつる先を持って、それを、ずっと手を離さずにたどっていくと、必ず同じ株元にたどり着きます。これを芋づる式といいます。このことで、芋づる式という言葉の意味合いや、芋は株元にしか付いていないことが分かります。芋のつるは、全部四方八方綺麗に配置しています。多感作用といい、ぶつからないように、自分が光を十分に当たるように調節しあいます。こういう背景やら、理屈をたどっていくと、ヒントになることもあるし、さつまいもの気持ちも分かってくることにつながります。また、ごぼうの種を、胸につけるとバッジになります。ごぼうの種の中は、すごくきれいな紫色で、周りが緑色です。大学に、



いろいろな野菜などを持って行き、話をしましたが、皆終わってから、その品物をわざわざ見に出てきましたから、そういう引き付けるようなことが出来ると面白いと思いました。

【司会】

続いて宇崎先生、先生のお話の中にありました、子ども達に気づかせるとか、見つける、理解させるコツ的なものを、改めて、学生の皆さんにも、教えてあげてください。

【宇崎課長】

見つける、見つけさせる、感じさせるということは、教える側が分かっていないと、出来ないの、先生側もしっかり勉強して、ここがポイントというところを、子ども達に話すようにしています。皆さんも、社会に出られたときに、それが求められると思います。いろいろ言われて動くのは簡単ですが、気付くのはとても難しいので、意識をして社会で頑張っていたきたいと思います。私の課でも、目配りをしています。この時には教えてあげなければいけないという、ポイントを教えて、あとは自分で考えさせるようにします。それが上達の早道だと思っています。皆さんも、全部教えてもらおうと成長がありませんので、上から教えていたときに、少し聞きながら、この人は何を求めているのかを気づくようにしてください。



【司会】

ふぁーまーがーるずの皆様、今回取組発表していただいた中で、芋植えてから収穫までの芋が育つ過程の、観察や、育て方、また、園児との交流を、補足的に報告していただきます。

【ふぁーまーがーるず】

苗植えのときは、園児たちと一緒に、少しずつ確認をしながら学んでいくような形で、芋の苗植えをしました。収穫までは、水やりを園児たちがし、私たちは、きちんと芋が育つように、当番を決めて草取りをしました。収穫のときは、園児たちと私たちと、先生方と集まってしました。園児たちはすごく楽しそうに掘っていて、芋があるかと思いつるを引っ張っても、たまに無くて残念そうにしている園児も見られました。それでもまだあるかもしれないよと、皆で声をかけあいながら、ここにこの根があるから、ここに芋がつながっているかもしれないと、声をかけて掘り、たくさんの芋を収穫することが出来ました。今回の、クッキング、収穫、苗植えを通して、いろいろと学ぶことが出来たので、ほんとにいい経験だったと感じています。

【司会】

頑張りましたね。では、川上先生のほうから。

【川上先生】

私が経験した中で、2つほど報告します。芋の苗を植え終わった時に、捨てられた苗があり、それを指導者が取り上げて、誰だといわんばかりに、問い詰めました。だれもだまっていました。そして、「この苗は植えてもらえなくて泣いている、その気持ちができる人」と言うと、全員がパッと手を上げました。先ほどの気づくということ。勝手に自分たちが植えて終わったということではなく、植えられなかった苗にも気を配ることまで気づきます。それが非常に必要だと思いました。それから、カードを渡し、芋に名前をつけて持って来るようにいうと、面白い名前がいっぱいついています。芋にはそれぞれ個性があり、いろいろな形があっても、それなりに芋だということを知らせるには面白い方法だと思いました。ですから、単なる苗を植えても、掘っても、その場に教育という一面を、どう織り込むかは、企画や、助言をする立場の人が、事前に勉強し、こだわっていく必要があると思いました。

【宇崎課長】

去年、こちらの保育園に来た時に、縦植えて植えた、すごく大きな、さつまいもを持って来ました。芋の大きさ（円周）を測るメジャーを持って、何センチぐらいあると思う、皆の頭ぐらいあるよと問いかけると、関心が向きました。それから、重さを量ってみようと言いました。小さくて手に持てる芋と、子どもの手では持ちきれないような芋は、どれくらい違うのかを、秤で量ると、また見方が変わります。お店で売っている芋とは違い、ずんぐりむっくりの芋も見せるのが、指導する立場と思って話をしました。毎回保育園に行くときには嗜好を凝らしていきます。工作（手作りの紙で、長さを書いておいたの）と芋を持って行って、巻いたら何センチのようなやり方もして、子どもを飽きさせないようにして、芋植えの苗の勉強をしました。

【司会】

農政局中村部次長、何か学生さんに問いかけていただけますか。

【中村】

皆さんのいろいろな体験を聞き、やはり、命あるものを頂く、食べ物に対する感謝の心を育むことが、食育の基本だと思います。食べ物に対する感謝ということ、その食べ物を、支えているのは農業をしている方々だということを、是非理解していただきたい。今、日本の農業は、非常に高齢化が進んでいます。全国で農家の方の平均は66歳。中国地方は70歳となっています。これがこのまま続けば、もう何年もすると日本農業がだめになってしまう。農業がだめになると、私たちの食べる食材がなくなってしまいます。今回、農業体験から学んだことが、食育に結びついていくと思います。今回の、農業体験で、農業について、どういう感想をもたれたかお聞きしたい。



【ふぁーまーがーるず】

農業体験をしたとき、園児から、自分が考えても見ない、思ってもいないような発言がたくさんあり、とても驚きました。また、そういうときに、子ども達のためには、どういう対応を自分たちがしたらいいのかということも、もっと深く考えて行動できるようになればいいなと感じました。



【ふぁーまーがーるず】

収穫の時に、子どもが、小さな芋を持ち、この芋は、自分たちが食べているお芋と、一緒の断面なのかなと聞いたので、折ってみようかと言って、折ると、いつも食べているさつまいもと一緒にだと言いました。自分には無い発想が、子どもから出たので、自分も勉強になりました。

【司会】

続いて、北口センター長、お願いします。

【北口】

農家の方は、何で高齢者だけになったのでしょうか。一生懸命作ったものが、経済ベースに乗りにくいのが実態です。店で売っている、りんごを見たときに、農家の方が、大変な苦勞をしているという、その労力とか、採算ベースになっているのかという経済ベースのところまで考えてほしいと思います。それで、食料の問題も、深く考える。食育と、農業と、世界の食糧事情と、全部リンクした形の中で皆さんひとりひとりが、食育のありかたはどうなのかという考え方になってほしいと思います。経済などへの関心はどうか、お聞きしてみたいと思います。

【学生】

・・・あまり気に留めたことがない。

【学生】

自分の家で農業を営んでいるので、あまり野菜市場とか見に行かないので、よくわからない。

【司会】

お野菜等を選ぶとき、価格や、品質的なものなど、だんだん選ぶ基準が出来てくるとは思います
が、宇崎先生このことについて何かありますか。

【宇崎課長】

今年の8月にジュニア野菜ソムリエという試験を取ることになりました。野菜ソムリエは、単
に野菜の栄養だけでなく、流通、保存、調理、そして、産地、栽培方法まで、勉強します。私も、
今回、ジュニア野菜ソムリエの資格をとるにあたって、野菜というものの認識を持ち、考え方が
変わり良かったと思います。皆さんも、野菜を買って食べる時、どこの産地かくらいは、見てい
ただいて、それだけ産地の農家が頑張っていることを認識していただいたら、ありがたいと思
います。

【司会】

食育より、生活力にはいると思います。産地表示や、期限表示など、生活する上での
知識も、食材の知識として、改めて見直していただきたいと思います。人に教えること
で自分が気づくという、教えるときのポイントや、今回の体験での気づきの部分を、自
分の知識として生かしてほしいと思います。先生方のご発言の中で、もう一度聞いてお
きたい、確認しておきたいことはありませんか。

【学生】

宇崎先生、野菜ソムリエのジュニアっていわれましたが、
いろんな種類、ほかにも種類があるのか、教えていただけま
すか。

【宇崎課長】

初級がジュニア、野菜ソムリエが中級、シニアが上級にな
りますが、シニアは日本でも人数は少ないです。野菜ソムリエという中級の資格を、たくさん
の方がチャレンジされていると思います。私も、資格を活かす活動を考えようと思っています。

【学生】

先ほど宇崎先生が、理解させたり、気づかせるポイントで、教える側がわかってないと、気づ
かされない、気づかすことが出来ないといわれたので、これからもっと勉強して、頑張りたい
と思いました。

【学生】

食育は子どもが産まれる20年前からやっていかなければならないというお話を聞いて、20
年前、20年前、20年前になると、すごく遡っていかないといけないことを思い、日本の食育
が崩れた、食育が必要になったのは、どれくらい前からなのか教えてください。

【川上先生】

昔は、普段の日常生活の中で、特に家庭の中で教えていたこと、体験していたことが、食育体
験でした。高度経済成長期がきて、それがなくなりました。それが今、20年前という時期も捉
えて、普段日常で、家庭で中心になってすべきことを、学校や、社会に求めている。いつから



かということも、責任も感じようとしなない、その世の中がおかしいのではないかということです。あと、営みの農業という問題も提起されました。農家の皆さんは、ご苦労されていますが、「農の心」をもって頑張っています。そこを理解してほしいと思います。生活のための職業ですから、儲からないと困ります。農地を荒らしてはいけませんから、耕さないといけない。出来たものは工業製品と違って、いろいろなものが出来ますから、思うように値段がついて売れない。例えば、曲がったきゅうりは、市場に出すと、取り扱ってもらえません、2足3文です。しかし、曲がったきゅうりをかごに入れて、「曲がっていてごめんなさい。」と、きゅうりの言葉を書いて売ると、飛ぶように売れました。その一言で、人間の気持ちは変わります。ここに、生き物の真髓があると思いますので、全国の消費者の皆さんにも、わかってもらいたい。そのうえでTPPなのか、競争なのか、なんなのかということを考えてほしいと思います。

【学生】

子ども達と接するときに、いろいろな芋があり、お店に売られているような綺麗な芋だけではなく、それぞれ大きさや重さが違うことを、子ども達に教えることがあまりできなかったのも、そういうことを教えてあげたいと思いました。先生方が言うておられた、個性が芋にはあるので、名前をつけることもすごくいいなと思いましたし、子ども達にも楽しんでもらえ、子ども達の感情とか気持ちも、変わるのも、すごくいいなと思いました。

【司会】

人の世界にも通じることが発見できたと思います。ひとつひとつの芋の形が違っている、それは人間社会と同じです。曲がったきゅうりは、はじかれる。しかし、はじかれたものはどうなるのか、そこの問いかけにつながっていきます。人間社会もある意味規格にあった人間を企業は求めますが、規格に外れた人間も、あるときには大事になることもあるので、そういうものを排除ではなく、うまく社会の中で共有することが大事だと感じました。最後に、それぞれの先生方から、メッセージという形で、おまじないなお言葉を一言づついただいて、区切りにしたいと思います。



【川上先生】

近くユネスコの無形文化遺産に、和食が登録されると思います。和食は日本人の伝統的な食文化ということで、皆さんにも、今後注目をしていただき、もっと深めていただきたいと思います。食文化と言いますが、中身は非常に濃い物があります。その中で、食べものも生き物ですから、俗に言うプライドがあるわけです。先般から続いている、あの食品の偽装の表示を、食材のほうから見てください。とんでもない話です。1人の人間を認めないで、ほかの名前を使ってしているわけです。人間でいきますと人権侵害です。それを、食べ物は何を言わない事をいいことに、食品偽装が、金儲けのためにされているとすれば、私はこの食育の基本の問題も、それから今のユネスコの無形文化遺産になってくる和食も、根本から訴えていかなければならない問題だと思います。

【宇崎課長】

ふぁーまーがーるずの皆さん、ほんとにたいへんだったと思います。私は、どんなときでも感動する気持ちを忘れないで頑張っていたきたいと思います。

【中村】

食育は、難しいことではなくて、食材に対する感謝の心を抱く、食材を作っている農家の方であったり、畜産農家のかたがたに、思いをはせれば、おのずと食材に対する感謝の心が芽生えてくる、そして食生活をきちんとしていかなければいけないという心が芽生えてくると思いますの

で、是非皆さん、出来るところから、実践していただきたいと思います。

【北口】

食育の究極は何かと考えたとき、命をいただくというテーマでもありますが、と畜場へ行って見て来ることだと思います。私の前任地が宮崎でした。口蹄疫が出ました。鳥インフルエンザも出ました。全部殺処分します。あのときに農家の方が、ものすごい涙を出していました。それが、映画になっていますので是非一度見ていただきたいと思います。あのときに1番思いましたが、農家の方が泣いている意味が、世間の評価の泣いてる意味の、かわいそうねと、すこし違うのではないかと思います。参考になると思います。と畜場とか、食鳥処理場の姿を見た上で、お肉をいただく。1回見に行くといいと思います。

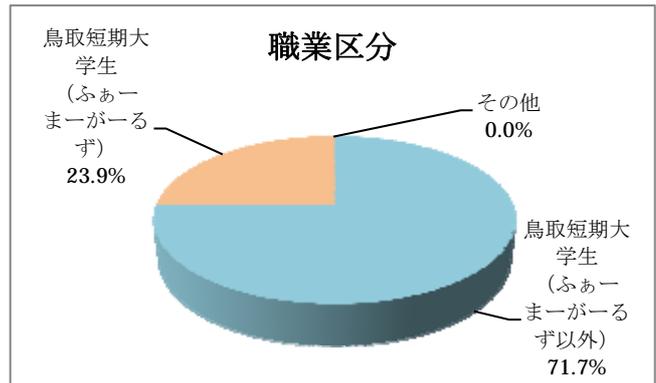
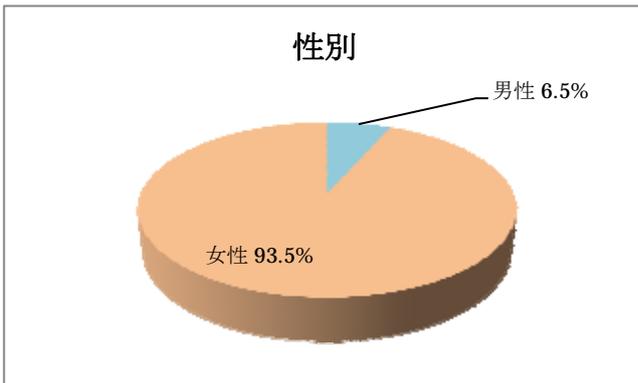


【司会】

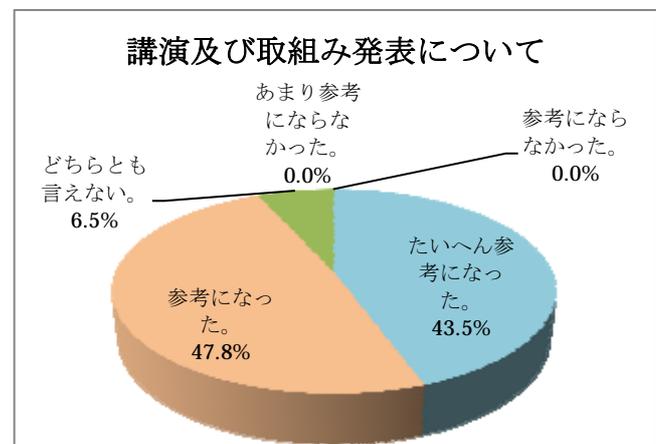
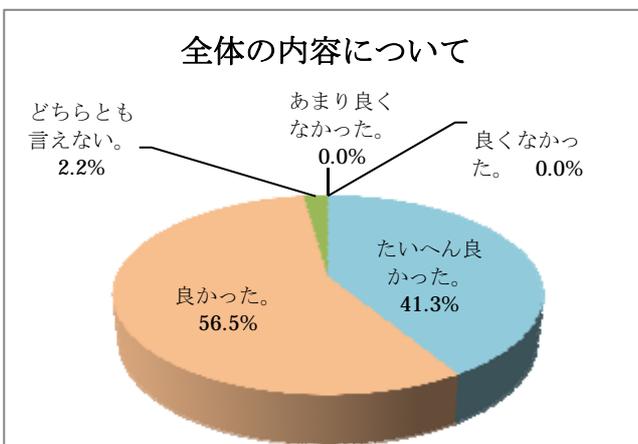
今日見たこと、感じたことを、ここにいない方に伝えてください。伝えることで、その情報が共有できます。こういうことを体験したと、誰かに伝えていただければ幸いです。

◇ 食育意見交換会アンケート

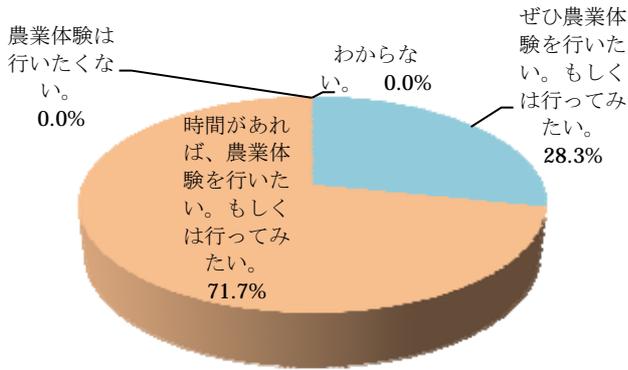
● 参加者の概要



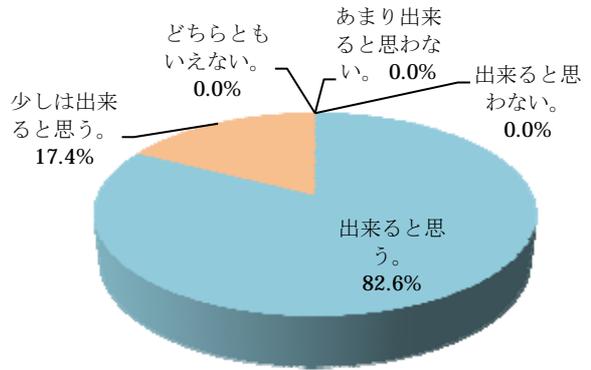
● 全体の感想



農業体験を行って、または農業体験の取組み発表を聞いて



農業体験を行うことにより「食の大切さ」を感じることが出来ると思いますか。



● アンケートでいただいた感想等の一部をご紹介します。

- たくさんの方が農業体験をすればいいと思う。
- 今、自分たちが食べている食物はすべてが農業などにかかわってくると思います。やはり、食べ物の元になるものを大切にしてほしい。
- 実際に農業体験をすることで、食物に関心を持つことができ、自分で育てることによって、命の大切さを学ぶことができるのではないかと思います。
- 本日の食育意見交換会では、子供たちに実際に農業体験をさせることによって、命の大切さや、農業の大切さ、また、農業体験の中で自分で気づき、発見することを学ぶことが大切だということがわかりました。私自身もまだ、食育に関してよくわからないことがたくさんあるので、今後食育にもっと関心を持って生きていきたいと思います。
- 子どもの時に農業体験をすることで食育の1つができると思うし、食べ物を作る大変さなどが分ると、大人になって食物の大切さが分かって、もっと食事という行為が大事になると思いました。
- 野菜をつくる大変さやいのちをいただいているということ子どもころから学べて大人になってもその子どもたちに伝えられるのでとてもいいことだと思いました。